

# 時代の生き方

## 3人の若者たちの証言

### 筋金入りのフリーター

# 外へ向かう気持ちが、 30代になって ようやく落ち着いてきた

大学を卒業して就職、という道を選ばず、  
単身オーストラリアに渡り、帰国後はボランティア団体で活動。  
その後、縁あって福島県の山村に移り住む。  
組織という枠に縛られず、自分に正直に20代を過ごしてきた  
筋金入りのフリーター、丸山富美さん。  
ヤング卒業の時期に差しかかり、  
見えていた風景は違ってきたのだろうか？

福島県南会津郡伊南村小学校支援員

### 丸山富美さん



まるやま ふみ

1969年、徳島市生まれ。大学卒業後、オーストラリアに1年滞在。帰国後、沖縄・西表島での民宿ヘルパーを経て、東京に事務局を置くNPO「エコクラブ」の専従スタッフとして、国内外での野外活動、体験型キャンプなどの企画、実施に携わる。1999年秋、93年から縁のあった福島県南会津郡伊南村へ移住。村役場の企画振興課に所属し、村内外の活性化事業に関する企画および実施に関わる。2002年春から1年あまり村を離れるが、再び伊南村に戻り現在に至る。

大学を卒業したら会社に入るものと、素直に思っていたんです。でも、就職活動のために参加した10日間の洋上セミナーを終えて、やはり夢だったオーストラリアに行こうと決心しました。ワーキングホリデービザを使って、

まず、パースという西海岸の町に行きま

#### ●丸山さんのある1日〈伊南村の冬編〉

- 6:00 部屋の寒さで目が覚める。布団から出たくない気持ちと向き合いながら、気合いを入れて起床！起きてすぐストーブに火を入れて、コタツの電源を入れる。
- 6:10 ひんやり冷たい台所でお湯を沸かす。手作りパンをトースターに入れて、温かい飲み物（ドリップコーヒーもしくはココアとインスタントコーヒーをブレンドしたもの）
- 6:30 朝食。身体を温めるためには食べることが最も大事なことだと豊國の暮らしで実感。
- 7:00 テレビを見ながら新聞を読んだり、ゆとりのある日はメールのチェックをする。
- 7:30 学校に向かう準備がほぼできたら、玄関前の雪がたし（雪かき）と車のエンジンを入れて暖気。
- 7:45 順調に準備が進めば学校へ出発！（準備がざりざりになると8時前になる）
- 8:00 勤務先の小学校に到着。職員室に入ったら、すぐに温かい緑茶をいただく。
- 8:10 学校で「朝の会」が始まる。教室には行かず、職員室で仕事開始。
- 9:30 2時間目のサポートに入るときは教室へ！
- 10:15 休み時間。子どもたちに誘われると、雪上の運動場もしくは体育館へ。3時間目、4時間目のサポートのときは、各時間教室に向かう。
- 11:45 4時間目のサポートがないときは、給食準備のために食堂に向かう。
- 12:10 生徒とついでに給食の準備（縦割り班で、1年生から6年生の生徒がみんな準備する）。
- 12:30 決められた班の生徒たちとついでに給食をいただく（とてもおいしい！）。
- 13:00 お昼休み。子どもたちに誘われるときもあるが、最近では職員室で先生方との会話を楽しむか、仕事をしていることが多い。
- 13:45 生徒たちと掃除。もしくは読書の時間。掃除のときは、玄関前の雪を生徒とついでに片づける。読書の時間を頼まれたときは、教室で本を読む。
- 14:10 5時間目のサポートのときは教室へ。もしくは職員室で作業をする。
- 15:00 退勤。
- 16:00 部屋に戻る。掃除・洗濯・夕食の準備をしたり、買い出しに出かけたり。
- 17:00 村の天然温泉（古町温泉）へ！この湯で温まるのが、夜の熟睡にはとても大事。
- 18:00 部屋に戻り、夕食の準備をする。隣人と時間が合えばついでに夕食。  
部屋に戻る。部屋を暖めて、思いついたときにメールチェックをしたり、友人知人に手紙を書いたり。あるいは、本を読んだり、うたた寝したり…。眠くなったら、頭まで布団に入って眠る。顔と頭が寒くて眠れないときも（引越してきた当初は9時前後には布団に入っていた…かな？）。暖かい布団の中で朝を待つ…。
- 20:00

こんなすごい体験があったなんて！

アンケート調査の限界を超えて、  
もっと若者たちの本音を知りたい。  
筋金入りのフリーター、学生社会起業家、先端科学の  
研究者の3人がいま、彼らが立っている場から、  
自分の生き方と社会について語ってくれた。





した。その後、東海岸のケアンズに行くために、4WDで荒野を旅する3週間のツアーに参加したんです。それが引き金でした。当時の私は、テントの設営も寝袋で眠ることも初めて。なのに、いきなり星が降ってくるような空の下で野宿をしたり、シャワーの代わりに池で泳ぐ〜みたいな生活。それでスコーンと抜けちゃった(笑)。こんなに全身の血が騒ぐような体験があったなんて。ドライバーを含め参加者は13人。いろんな国の人がいて雰囲気もすごく良かった。そのとき初めて、自分はこうした異文化に触れていると心地いいんだというのを発見したんです。

オーストラリアではナイトマーケットで働いたり、あちこちを旅して過ごしました。結局、1年間の滞在期間が終わったあともまっすぐ日本に戻らず、タイに立ち寄り1カ月ほど旅行することに。当時は日本に帰って来ても「動きたい」の一心でした。就職という選択肢は、もう頭になかった。そんな気持ちのまま、今度は民宿のヘルパーとして沖縄の西表島へ行っただけです。私にとって沖縄は、日本でありながら異文化の漂うところでした。

私が滞在していた民宿には、会社を辞めて島へたどり着いた20代の人たちが何人もいました。そんな彼らといっしょに働き、暮らしながら、ハッと気づいたんです。

このままではいけない。彼らは一度組織を経験してからここにやって来たわけだけども、5年後、10年後の私はいったいなにをしているんだろう？と。西表島の体験を終えたら、カナダかニュージーランドに行くつもりだったので、毎日生活するうち、次第にそれじゃダメだと思うようになってきました。自分に与えられたことを責任持ってやるような仕事をしなきゃ、と。それで再び東京に戻ったんです。

野外活動と環境教育をテーマに活動していたNPO「エコクラブ」にかかわるようになったのは、伊南村を訪れたことがきっかけです。現地で代表の高野さんに会い、エコクラブの中のワイルドスクールジャパンという組織の専従スタッフとして働き始めた。組織の中で働くことも含め、毎日が初めての経験ばかり。ちょうどプロジェクトを立ち上げたときで、本当に忙しかっただけ、すごく勉強になりましたね。

## 感動の連続だった 伊南村での暮らし

専従スタッフを辞めたのは99年の春です。ただ、エコクラブの活動には中心にかかわっていたので、すぐには離れられなかった。東京で生活していくには働かなきゃ、ということ、ビルの掃除や新聞社で

のアルバイトを始めました。当時の私は自分がどこに向かえばいいのかわからず、悶々としていた時期です。そんなとき、数年前ぶりに伊南村を訪れ、以前お世話になった人たちと会ったことがきっかけで、村で臨時職員として働いてみないか？と声をかけてもらいました。組織を離れて半年くらい経った頃です。

正直言って迷いはありましたが、そのときに思ったのは日々の自分の暮らしのこと。水道もガスも電気もないところでキャンプをし、「生きるために必要なものってそんなにない」と実感しながらも、私の日常といえば、狭いアパートで暮らし、食事はコンビニか外食、夜はエアコンがないと眠れない——そうした生活に疑問を抱いていた頃でした。

そんなこともあって、ふと、村に行ってみようと思ったのでしよう。伊南村でなにをしようとか、これからどう生きていこうとかいうことも、当時はまだなかった。最初の契約期間は半年だったので、冬の奥会津で頭を冷やしてなにか考えられれば……という気持ちでした。

伊南村での生活は発見の連続でした。感動は尽きなかったですね。風景はもちろん、地域の人とかかわりや日々の営み……。小さなことから大きなことまで毎日感動していました。結局、半年を過ぎて



継続して仕事をいただくことになり、村の役場には2年半お世話になりました。

それが終わると、今度は栃木県の小さな町で民間企業と契約して働き始めました。仕事は忙しかったけど、いろいろなことを任されていたのでやりがいがありました。でも、結局1年ちよとで離れることを決断しました。働き始める時期がもう少し早かったら、あと数年はチャレンジしていたかもしれません。でも、再び日常の「生き方」に視点が向いていったんです。自分はこのいう暮らしをあと5年も10年も続けていきたいのかなって…。

栃木での仕事を辞め、昨年の夏、いったんは徳島市の実家に帰ったのですが、再び伊南村に戻ってきました。いまは小学校で働かせてもらっています。教員資格を持ってなくてもできる支援員という制度があり、たまたま1月で辞められた方の後任として、徳島で仕事を探すという道もあったと思うのですが、やっぱりこの土地の魅力から離れられなかったのかな…。こういう山間の村での生活を選べるなら、選びたいなって思ってたんです。

## 意識的に 選び続けていくことが大切

20代は、自分の意識が外へ外へと向いて

いました。エコクラブで働いていたときも、どうしてもじっとしていられなかった。でも、30代になってその気持ちもようやく落ち着いてきたような気がします。これまでは泥の混じった水を一生懸命ミキシングしていたのが、いまはゆっくり沈殿させたいという気持ち…。

なにがそうさせたんだろうと考えると、一つは出会いです。伊南村で出会った人たちの影響が大きい。この土地で生まれ育った人たちは、70代、80代になってもステキで、かついい人が多いですよ。何十年も同じ山を歩き、同じ畑を耕し、同じものを作り続けているからなのでしょう。どうしてこんなに魅力的な人間になれるんだろう？って不思議で…。そっか、外に出ていくことだけが、人を磨くんじやない。一つの場所に落ち着いて暮らしながらも、意識さえ内と外の両方に向けていけば、必要な知識や情報って得られるんだなって、いろいろな人たちとの出会いから思うようになったんです。

私が大学を卒業する頃は、バブルの余韻がまだあって、就職活動をしない人はほとんどいませんでした。私は別に異端児でもなんでもなかったけれど、オーストラリアへの好奇心から、就職しない道を選んだ。いま、フリーターと呼ばれる人たちの中にも、夢や目的がある人はたくさんい

ると思います。でも、つねに自分が意識的に選んでそれをやっていたら、必ずどこかに行き着くんじやないかな。迷い続けたら、それは一生懸命考えていることだから



ら。私は寄り道ばかりしてきたけれど、それも悪くなかったかなって思っています。

これから考えていきたいのは、家族を持つということ。人生にとつて、それはやっぱり必要な時間だと思っから。できればこんな土地で、という希望はあるけど、どうなるか(笑)。東京で暮らすとは思わないですね。外国は、あの山がきれいだったからもう一度行きたいとか、10年行ってないから再び訪れたいというのはありますが、ずっと暮らしたい場所はとくにないかな。もちろん、ステキな風景があったら、それを見たいというのはあるんですが…。

だけど、そういう風景はここにもあるんですよ。尾白山の眺めだったり、伊南川の流れだったり。「海外に行く子どもたちの笑顔がいい」ってよく耳にしますが、この子どもたちもむちゃくちゃ笑顔がいいんですよ。実は身近にそういうものがあるってことに気づいたのは、ここで暮らしているからかもしれない。やはり東京から移り住んできた友だちと話していたとき、彼女がこの村から見える風景はヒマラヤみたいなんだよねって言ったことがあったんです。私はヒマラヤに行ったことはないけど、素直に「そうだな」って思えた。そんな日々の小さなことが喜びになる。豊かになつて思う瞬間ですよ。

学生社会起業家

# できることは全部やりたい。それが自分のスタイル

小中学校などでバイオテクノロジーの実験教室を開いているベンチャー企業リバネス。その代表取締役として活躍する丸幸弘さんは、東京大学大学院で最先端のバイオを研究している研究者でもある。そんな二足のわらじを履く若き起業家に、日々の生活や生い立ち、これからの夢などを聞いた。

有限会社リバネス代表取締役

## 丸 幸弘さん

まる ゆきひろ

1978年、横浜市生まれ。東京薬科大学を卒業後、東京大学大学院農学生命科学研究科に入学し、現在は応用生命工学専攻博士課程に在籍中。2002年6月に、大学院生の友人らと小中学生向けにバイオテクノロジー関連の実験教室を提供する、日本初のバイオ教育会社・(有)リバネスを設立し、社長に就任。講師やスタッフはすべて現役の大学生や大学院生、研究者。自らも社長業のかたわら、寸暇を惜しんでバイオの研究にいそんでいる。(ホームページ <http://www.leaveanest.com/index.htm>)



やっていることは簡単なんです。実験教室を子どもたちに向けて開いているだけ。なにが特徴かというと、最先端のバイオテクノロジーを子どもたちにわかりやすく伝えるということ。子どもたちの好奇心を刺激するものを提供してあげたらいいなと思っています。始めたきっかけは、大学院でやっている自分の研究が楽しくて、こんなにおもしろいんだったら、それをいろいろな人に分けてあげたいと思ったからです。

僕はあまり学校に行かなかったんですけど、それは授業が楽しくなかったから。いわゆる「落ちこぼれ」ですね。でも、授業で学んできたことをいま使っているかとい

## いまの教育って なんか違うよな

### ●丸さんのある1週間

月曜日	
1日研究の日です	
7時30分～	起床、仕事(1時間)
9時30分～10時	学校舎。その後、研究室の掃除
11時～24時	研究(13時間)
0時30分～	帰宅、仕事(2時間)
3時	就寝
火曜日	
10時～	起床、仕事(1時間)
13時～24時	研究(11時間)
0時30分～	帰宅、仕事(2時間)
3時	就寝
水曜日	
10時～	起床、仕事(4時間)
15時～18時	研究室ゼミ
19時～24時	研究(4時間)
0時30分～	帰宅、仕事(2時間)
3時	就寝
木曜日	
8時～	起床、仕事(1時間)
10時～12時	営業外回り(2時間)
13時～24時	研究(11時間)
0時30分～	帰宅、仕事(2時間)
3時	就寝
金曜日	
8時～	起床、仕事(1時間)
10時～12時	営業外回り(2時間)
13時～20時	研究(7時間)
21時～23時	バンドの練習
0時30分～	帰宅、仕事(2時間)
3時	就寝
土曜日	
1日自由の日です	
日曜日	
1日仕事の日です	
7時	起床
9時～	取締役会
10時～12時	全体会議
13時～18時	プロジェクト会議
19時～	飲み会
0時30分	帰宅

丸幸弘25歳、研究者と社長を両立させるため日々精進しています(笑)。研究時間40時間、仕事時間30時間、遊び時間20時間が、通常の1週間の目標です。でも、会社のプロジェクト等の締め切りがあると40時間寝ないで仕事をすることもありますし、学会が近くなれば研究室に3日間泊り込んで研究をすることもあります。しかし、基本的に睡眠時間は1日平均6時間！タイムマネジメントさえしっかりしていれば、こんな生活も可能です。土曜日が1日自由な日、日曜日が1日仕事の日、月曜日が1日研究の日。そんな決まりごとを勝手に自分でつづっています。





(有)リバネスが提供している実験教室

うと、ほとんど使っていない気がします。じゃあ、なんで「落ちこぼれ」なんて言われなきゃならなかったんだろう。現にこうして普通に生活しているし、逆に生物学とバイオテクノロジーはすごく興味を持ったからいっぱい勉強して(自分では勉強したつもりはないけど)、こうして研究者になれた。だから、いまの教育ってなんか違うよなって思った。

それに、身近にも落ちこぼれていく人がたくさんいたので、彼らにもできることがあるはずなのに、たった一つの物差しで測ることで、せつかくの可能性をつぶしているんじゃないかと思った。それで始めたのが、この実験教室だったんです。

リバネスを立ち上げたのは、大学院の修士課程のときで、この4月から博士課程の2年になります。修士の新卒で普通に就職するという道もあったと思うんだけど、日本の企業に入っても、自分がチャレンジしたいときにできる体質がそこにあるのかなって、ずっと疑問に思っていた。だから、ちよつと自分で事業をやってみる時間をとつてもいいかなと、あえて就職はしなかった。でも、僕は企業に入ったら、うまくやっていくタイプなんです(笑)。4年間、牛丼のチェーン店でずっとアルバイトをしていて、ちゃんと昇進し、採用の面接やお金の管理をするまでになりましたから。本当

は「お前ならマネージャーになれるから就職しろ」と言われたんですが、「自分の進みたい道があるんです」って辞退してきた。やはりそこでもできることは牛丼を売るという仕事であつて、それは自分の選んだ仕事ではありませんでしたから。もちろん、その中で改良を重ねていくことは、とてもおもしろいんです。だけど、やっぱり枠からは外れられない。だったら後悔しないように、失敗してもいいということで、この会社を立ち上げた。失敗は成功のもとだと信じていますから。

### 行動を起こせば、世の中は変わる

学生がなにかやることで日本は変わっていくと思うんです。たとえば、理工系の人なんかは、「ドクターを出しても職がない」とかいろいろ言われていますよね。それを世の中のせいにしてしまう人もいますが、僕はそうは思わない。自分からアクションを起こせば、世の中は変わるんだと信じています。

僕は文句を言わないですよ。好き放題やって、楽しく生きてますから。文句を言うぐらいなら、暴れまくる(笑)。そういう不平不満を行動力に変えていけば、なんでもできるんじゃないかな。世の中が進歩





して複雑化しているからこそ、「できる」とは広がっているじゃないかって思う。たとえばテクノロジーに関しても、昔の人はパソコンは使えなかったわけだから。いまの女子高生なんかすごいですよ。携帯電話の早打ち選手権があるんですから。そんな能力があれば、もつとほかに活かせよ！って思うこともありますけど(笑)。

あるベンチャー企業の社長と話したときに、「丸君もアメリカに行っちゃえばいいんだよ。日本は人を育ててくれないし、資金も出してくれない、出て来る芽はつぶそうとするし。向こうに行ったら、もつと稼げるしおもしろいことができるよ」って。

でも、僕は断固「行きません！」って言った。僕は日本でやりたいんです。だけれが日本の現状をブレイクスルーしないといけないって感じています。いま、渡米せずに日本の中だけでがんばっているバイオベンチャーが出てきていますが、自分もそうした一つになりたいって思う。日本の体質やシステムを変えながら。それが僕の人生における大きな目標の一つです。

## 基本は自分がハッピーでいられるか

日本では昔から「二兎を追う者は一兎をも得ず」ということわざがあって、一つの

ことに集中しなさいと言われてますよね。僕はそうは思っていないで、「アンド」の考え。つまり「AアンドB」で、両方できるなら、両方やりなさいと。それが両立ってことですよね。人は勉強だけできれば尊敬されるわけじゃないし、口ばかり達者でも尊敬されない。勉強もして、ちゃんとみんなとコミュニケーションがとれて、なおかついろいろなことをやっていきたい。しかも、それぞれ手を抜かず、全力でね。

僕は自分がハッピーでいられるかどうか基本にあるんです。そうじゃなかったら徹夜なんてできない。深夜まで研究や仕事に没頭しているのも、別にお金のためでも世の中のためでもなく、自分が楽しいから。まず自分が楽しいこと、気持ちいいことが大事。その上で世の中のためになることをやっていければいいと思っています。

両親からは、「責任持って一生懸命やればいいから、好きなことをやりなさい」と言われて育った。そのへんはすごく感謝しています。自分の能力を伸ばしてくれたのは、親の教育にあったのかなって思う。学校から手に入れたものはあまりない。仲間だけ。仲間というのは好きで、ひたすらファミレスに溜まってカラオケに行って、という高校時代でしたから。バイクも乗っていて、いわゆる「走り屋」だった。とにかくグループをつくるのが大好きだった。昔から「丸の周

りには良くも悪くも人が集まる」って言われていました。でも、みんなに「行くぞー」って号令かけるのは好きなんだけど、自分がやりたくないし、いくら誘われても動かない。相当なわがままですよね(笑)。

これからの10年ですか？ できれば助手になって、研究の現場に身を置いておきたいという希望はあります。興味のあることを学ぶことは嫌いじゃないので。二つ目の可能性として、ドクターを卒業して企業に就職する、という道も。世間を見るにはそれもありかな……。もう一つは、経営学でも勉強してみようと思っている。でも、なにをするにしろ、少なくともリバネスを維持していくことは間違いないと思います。違うことをやるにしても、リバネスを維持する方法を残してから出ていく。

そうですね、どうなるんでしょう？ 正直言うと、そんなことを聞かれてもわからないんです。学びながらビジネスもやってみたいし、研究も続けていきたい。本音を言うと全部やっていきたい。そんなのは甘いですかね(笑)。でも、本当に全部やりたいし、それが自分のスタイルだと思っている。いいじゃないですか、「一人は人だろ、これがオレのスタイルだよ」ってね。



先端科学の研究者

# 幻想の瓦解の後に、 フリーランスな 生き方が生まれる

量子化学、コンピューター・シミュレーション、分子生物学、  
最先端科学が複合するポストゲノム研究。

世界中がしのぎを削るこの分野に、大学院で取り組んできた齋藤紫野さん。

3月には研究生活にピリオドを打つ。

ひょうひょうとした彼女の内側では、

とことん「自分」と「世間」の関係を考え詰めた様子がうかがえた。

東京工業大学大学院  
生命理工学研究科  
生体分子機能工学専攻

齋藤紫野さん

さいとう しの

1979年東京生まれ。東京工業大学生体分子工学科卒。2004年同大学院生体分子機能工学専攻修了予定。4月よりI S E（日本IBMシステムズ・エンジニアリング株式会社）でS Eとして勤務予定。修士論文のタイトルは「レチナルタンパク質の吸収波長制御に関する量子化学的研究」。大型計算機を用いたシミュレーションで視覚を司るタンパク質の機能を原子レベルで調べた。趣味は音楽鑑賞でジャンルはポップ、ロック、電子音楽全般。就職にともなう一人暮らしが最近の懸案事項。



## ● 齋藤さんの平均的な1日

- 6:00~8:00 起床。前日の夕食の残りがあればそれを食べ、メールチェックしてから学校へ
- 9:00~13:00 登校。時刻はまちまち。学校のメールアドレスをチェックして、走らせていた計算の経過を見たり、細々とした作業で午前中はつぶれることが多い。行きがけに買ったコンビニご飯を食べる
- 13:00~ 引き続き、研究
- 15:00~18:00 曜日によっては夕方に輪講やゼミが入る。疲れているときは、ゼミ終了後そのまま帰ることも
- 18:00~19:00 生協やコンビニで買ったパンかおにぎりで夕食
- 22:00~24:00 帰宅。23時59分終電までには必ず帰宅する

## なぜ、自分の生き方を 持とうとするのか

先日のグループインタビューは、私の予想以上の盛り上がりでした。いい大学で人生順風満帆、あとは帆を上げていけば風に乗って行けるように見える人たちは、かなりなのに、そろいもそろって、自分の生き方をどうするか真剣に考えている。まず、そこに驚きました。そして、あつ、私だけじゃないんだと安心しました。あの場の感じは、建前ではなく、本気でそう思っている人のほうが圧倒的に多かったですよ。と同時に、すごく納得もできました。やっぱりいまの社会状況は、どう見たって過去の学歴だけでやっていけないことだらけ、大学生でも気づきますよね。いや、大学生の立場だから、なおさら気がつくのかもしれない…。あふれる情報の中で、いろんなものが相対化されてしまっただけで、自分が世界のどの位置にあるということがわかってしまう。だからこそ、それをすごく意識してしまってます。

日本だけに限るなら、たとえば東大というムラ社会だけを見ていけばいいのかもしれない。でも、いまはいやでも外の世界を見せられてしまう。そうすると、自分の相対的な位置がわかってしまう。それならば、東大出てフリーターだっていいじゃない



い、と思ってしまいます。そのほうが、ずっと自覚的に生きていくことになるから。そんなふうを考えていたのが私だけではないので、ちよつと驚いたけど、納得もきました。

これまで世間で「良い」とされてきたステレオタイプな「成功観」が、私たちにどうしては必ずしも「成功」とは思えなくなってきたことが、その背景にあるのだと思います。これは、周りの友だちなどと話をしているだけでも明らかです。

すごくハングリーな気持ちを持っていないと生活が成り立たない時代には、生活が

成り立つことが、自立した生き方であり、「成功」だったと思います。だけど、いまの私たちの生活は、なにかしら生きていけるくらいの豊かさがベースにあります。その上での「成功した」生き方ってなんだろうって考えると、具体的にどうしたらいいかわからなくなってしまうんです。「ゴールにたどり着けない感」みたいなものがある……と言ったらいいんでしょうか？

選択肢がたくさんあることも影響しているのかもしれないですね。生き方を一つ選ぶには、その先の生き方も想定しなくてはならないからです。これって、ぜいた

くなことなんでしょうか。やっぱりモラトリアムの一種と思われてしまうのかな？

## 自分が立つ社会の理想と現実

私たちの世代は、良い意味でも悪い意味でも個人主義が浸透していて、自分自身がどうありたいか、どうあるべきか、という問題については、外から見るとよりもずっと自覚的な年代だと思います。そういう価値観が「強制された」とまでは言いませんが、「おススメされた」という感じ……。だけど、上の世代の価値観も、世間のシステムも、そういう風にはなっていないんじゃないの？という思いは強く持っています。たとえば、偏差値や点数で人間を評価するのはおかしいと言ってるくせに、結局、他に評価する手段がなかったじゃない？とか……。

そして、いよいよ学生を卒業し社会に出て行くときになると、世間に合わせる「ふり」をして、なんとか「自分は自分」で渡っていくようにする。そういう生き方には、もう満足できなくなっているように感じます。だから、みんなまじめに自分がどう生きるかを考え始めているんだと思う。

そこには迷いも生じてきますが、海外生活の長い帰国子女の人たちには、そうした迷いはなさそうでした。きっと彼らの中で

は、理想と現実の社会は分かれていないのでしょう。そして、おそらくそれができる世界で、そのまま自分の生き方を貫けてしまえるようにも思えます。だけど、私は同じ研究室から参加していたH君の言いに共感できました。結婚して、子どもが生まれて、夫婦で助けあいながら生活するのはいいけれど、「それで、仕事はどうなるの？」って。私たちみたいな理系の研究者が、日本の化学メーカーで研究職に就いて、1年休職してから復職するのに、どれほどのエネルギーを費やさなくてはならないか……。そんなふうまくいくわけがないじゃん、って思うんです。リアリティーを持った生き方を描いて戸惑う人、あるべき姿を描いて信じ切っている人、この間で右往左往しているのが私たちではないのかな。

そういう自分の生き方を考える上では、やはり両親の影響を無意識のうちに受けているのかもしれないね。父は50代半ば。仕事に打ち込んできた人です。母は、その時代には珍しく理系の大学院を出た人。だから、仕事をしてキャリアアップしようと思えばできたはずなんです。結婚して専業主婦になった。

私の通っていた中学・高校は、「自由」と「自立」を刷り込まれる学校でしたから、女性も社会に出て役に立つのが当たり前





という空気がありました。その一方で、家に帰るとマスターを持った母親が家事をしている。すごく大きなギャップを感じましたね。でも、自分がいまマスターまで来てみて、これからドクターに進むのか、就職なのか、どんな仕事をするのか、どう生きていくのか…と考え始めると「なんだ、そんなに大きなギャップじゃなかったんだ」と思えるんです。

## 自分の存在証明こそモチベーション

要するに、自分がなにをしたいのか、ということなんです。だから、超優良大企業に自分とは違う分野の研究スタッフとして採用されるよりも、「君のいま研究している分野を、ウチに来て続けてほしい」と言われて、小さな会社やベンチャーで働くほうを選択する人は、私の周りにもかなりいます。

たとえば、研究室の先輩は、BLS (Business Laboratory for Students) という学生団体を組織して、起業のための勉強会やセミナーを開いています。それにかんりの数の学生が、熱心に参加しているんです。東大、慶応、東工大などの学生たちです。会社に使われるより、会社を興す。MITを真似ているだけに見えるかも

しませんが、はじめにそういうコースを考えている学生たちが確実にいます。会社に入るとしても、自分でなにか一芸となる技術や研究実績を持って入って、それを活かしたい。そう考えている人たちがかり…。

もちろん、大企業に就職する魅力がまったく感じてないわけではないと思います。でも、やっぱり「自己確立」ということが引つかかってくるんです。真の自己確立ができていけば、大勢の中の一人であっていいわけですが、最初からそれほどの自信は持てない。だとしたら、分母が小さいほうが自分の価値が見えやすいし、起業すれば自分を旗揚げした証しにもなる。そう考えるんです。とにかく、自己主張し

たい、自分の存在証明をしたい。それが、私たちのモチベーションになっていると言ってもいいのかもしれない。

## グローバル競争社会に立つための自己

これほどまでに、私たちが「自己」にこだわるのは、研究や仕事の舞台がすでにグローバルな規模に広がってしまっていることにも理由があります。欧米の人たちと対峙して仕事をする必要が出てくると、彼らは揺るがない自己を持っているように感じられ、気後れしてしまうんです。個人的にはアメリカ的合理主義に対して抵抗感があります。しかし、彼らの流儀はやは

り合理的だし、現実にはグローバルスタンダードとして通用しています。

実際に、私たちのバイオ研究領域では、欧米的合理主義の勝利を目の当たりにしています。だから、焦るのかもしれない。セラ社のヒトゲノム解析完了は、その象徴的な出来事でした。当時、国家プロジェクトで取り組んでいた日本は、質の問題はありますが、まだ染色体を1〜2本解読し終えた程度だったのです。研究・開発を仕事にする者にとって、このギャップはあまりに大きい。そういう相手と向き合うには、どうしても確固たる自己が必要だと思ってしまうんです。そう思っているのは、私だけではないと思いますよ。

いま、若い世代のフリーター現象が問題にされていますが、私はフリーター志向というよりも、フリーランス志向なのでは？と感じています。グループ・インタビュウの中で、「出産や育児で地位を失っても、経験は自分に残るから、それを糧に再出発できる。離職は後戻りではない」と言った人がいました。私自身は、現実には難しいと思ってしまうのですが、それこそまさにフリーランス志向だと思います。これから、もつとフリーランス志向が進むんじゃないでしょうか。私たちは、これまでのいろいろな幻想が瓦解してしまっていることに気がついてしまっているのですから。

